

成辰の華一土橋虎水 相模湖一菊地甘水 舟
 井慶一藤川晴水 富樫の涙一石井桑水 静一
 中村思水 花吹雪一中谷姿水 村上喜剣一梅
 沢潤水 吉野山霞古一小林総水 別れの盃一
 一水会萩野甲水 道成寺一飴谷六水 会長松
 田静水 竜の口一水会小山田貫水 西郷隆
 盛一花俣圭水 名月逢坂山一鈴木流泉 巖流
 島一島田春水 川中島一中谷襄水 盛会裡に
 八時終演。

京都琵琶協会 四月五日(土)昼一時會員矢
 月例四月集會 吹旭美津女史宅。寒氣も漸
 く遠のき当日は二十度という春暖で数氏の病
 氣や事故者を除き田中鵬水、梅原旭濤、安住
 旭康、矢吹旭美津、牧南水、古谷寛水、荒木
 旭媛、水内焔水、峰口高昇、平井春嶺、植村
 真水の諸氏出席、牧會計理事から去る三月三
 十日開催演奏会の収支計算報告があり続いて
 禪師と正宗一安住、武石浩坡一峰口、小野訓
 導一水内、羽衣一田中、川中島一植村の各演
 奏のあと夕刻京みやこに至り食事を共にして
 七時前散会した。

日本琵琶振興会 四月十一日(金)夕五時東
 演 奏 大 会 京上野本牧亭、主催會長
 鈴木流泉氏(五〇〇円)。薩摩守一緒方晴舟
 西郷隆盛一青木晴城 会津の華一杉山旗水
 民宗と敏鷲一井上雅翔 吹雪の敵一山田洲鳳
 琵琶塚一鈴木流泉 吟舞本能寺一舞宮坂菊風
 吟中村声風 茨木一松田静水 扇の的一田中
 旭嶺 山科の別れ一新瀧五十嵐雅水 桜一京
 都平井春嶺 吟舞春望一舞永田咏混、吟菅根
 悠光 景清一新瀧後藤甚水。

東 都 旭 会 四月十二日(土)昼一時東京
 第二回演奏会 豊島区民センターホール、
 後援日本芸能顕彰会、芸の友社。(五〇〇円)
 今回は合奏を主体として企画され独奏は藤巻
 會長のみに絞ったのが特徴。春に歌わん！会
 員合奏 娘みゆき一柴田旭容・絃藤巻旭陽
 五条橋一藤巻旭星、清田旭茜・絃黒田旭映
 羅生門一内田旭草・絃旭陽 秋風故郷山一林
 田旭史・絃藤巻旭彰、南崎旭薫 大楠公一橋
 上旭英、大野旭翠・絃旭鴻 綱館一旭陽、旭
 彰、旭映・絃旭鴻、旭史、旭章 北の庄一旭
 薫・絃旭鴻 対王丸一藤巻旭鴻 新琵琶楽(1)
 舞曲一番(2)荒城の月変奏曲一旭薫・旭史、旭
 映、旭章、旭茜、旭翠、旭蓉、正絃旭英・大
 絃旭彰・小絃旭陽・琴鬼本、村上・尺八牧原
 四時終演、盛會。

日本琵琶振興会の 會長鈴木流泉氏不例
 月例会は一時休止 (眼底出血)にて静養
 を要する為毎月第四日曜に東京新宿洲鳳會館
 で開催の首記は一時休会される事となった。

○錦心流関西新進演奏会 五月五日(休)午後
 一時大阪天神筋朝陽會館、主催小川吟水氏、
 各門下の新鋭を中心に、東憲水、福島漂水、
 江原錦和、中山鳳水、内田欽水各氏ゲスト
 出演。

○京都琵琶協会五月定期茶話会 五月十日
 (土)午後一時會員梅原旭濤女史宅(向日市西
 向日かえて町山端二電話九三一一一六九二)
 ○神戸琵琶愛吟会 五月十一日(日)午後一時
 神戸市三宮神戸新聞KCCホール、來賓柴
 田旭堂、木原綾子両女史(來聴歓迎)
 ○加藤錦陽演奏会 五月十八日(日)午後一時
 三鷹市民會館、浅野晴風一門出演。

○晴風リサイタル 五月二十四日(土)夕六時
 東京中野区立文化センター1、主催浅野晴風
 氏。物語①高瀬舟 ②坂崎出羽守 ③勤進
 帳 (入場料一、五〇〇円)
 ○都派琵琶錦穂一門演奏会 (別項参照)

あ 蓄かたし、蓄ふくらむ、ちらほら
 と 咲き、五分咲き、桜花らんまん、落
 が 花盛ん……。花の命は短くて、アッ
 き というまに風薫る五月となった。空
 には雲雀が長閑にさえずり、野にはすみれ、
 たんぽうが美を競う。しばらくは我が世の春
 を謳歌し、幽雅な琵琶の音締めを奏しめよう
 ●琵琶という伝統芸能が如何にむつかしいも
 のか、同時にこのむつかしさを克服して一人
 前の琵琶人となった人の心身両面の奥床しさ
 優美さ●これは他の芸能界では到底見られぬ
 格調の高いもので茨の道を踏み越えた経験者
 でなければ語る資格がない●他の芸能に対し
 て感張るつもりは決してないが之が本当の琵
 琶人の本音でなければならぬ●詳しくは考う
 べし。

昭和五十年五月一日発行(非売品)
 編集者 植村 真 水
 発行所 京 絃 社
 〒569 高槻市津之江北町一ノ二二三
 電話 〇七二六八五六〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二五一号 京 絃 社

我が道を行く六十五年 (二五)

西郷 天風



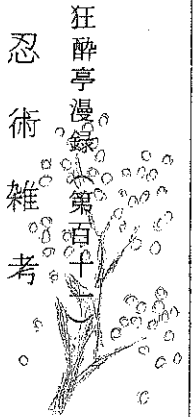
さて此の大民主人の逝去によって私の運命も虚脱状態の裡に定まり、暫くはなす事もなく悶々の日を重ねていた。其間に小原久忠は上野公園下の鉄道学校実習科を了えて日本鉄道(今日の国鉄)の常磐線乗務員となり、度々水戸に立寄っては何かとなく慰めて帰るのだった。亦吉川直吉氏も海軍省の上役を海水浴に言寄せて連れ来り、私を紹介して就職をすすめるのであった。それ等の友情には涙する程感激し乍らも就職には一向気乗りせず、やがて其年も暮に近い或日フラフラとアテもなく上京、古疍にふれる思いで銀座の八咫家を訪問すれば意外にも上気嫌の歓迎で、こちらから問うまでもなく、大民其後の模様を知らせてくれたのであった。

都新聞社に隣接する宅地を求め、其処に少々風変りの洋服店建造に取かゝったが、それで安心したものか、間もなく安樂椅子に座したまゝ側で針仕事中の母堂も気付かぬ程静かに昇天され、後継者を弟の和吉さんに取決めておかれた由、又私の行方不明の問題はサイズチ頭の失踪によって自ら釈明されたとのことだった。しかしそもその原因が私の水戸行にあったことを思えば、其責は私生涯を通して忘れられるものではなく、我一生を琵琶一筋に生き貫くこと以外に、山岸氏の霊を慰める途なしと心に契つたのも其時であった。

顧みれば大正七年頃の春だった、水戸の県立高等女学校開校記念の学芸会に、生徒達の発案による、琵琶を主題とした活人画と称する寸劇があり、私とその琵琶を担当したことがあった。

仲国が小督のかくれ家に立寄る場面、琴を調べる小督の局と、馬上に横笛を構えておる仲国とが相対し、両者の間に片折戸や秋草の配置よろしく、女房の姿も見ゆる情景で、琵琶歌の「峯の風か松風か」の大干に始まり「とめつゝ行けば一叢の、松の蔭なる片折戸」あたりから、幕明けとなり除々に不動の人間像が面の如く現われ、笛の役仕り奉りし時、聞覚えつる調べにて、殊更曲は想夫恋で幕となる、かなり永い時間不動の姿勢は中々骨が折れると云う当人達も、しばし鳴りやまぬ満場の拍手に氣をよくし、当日第一の評判に満悦を禁じ得なかつた訳だが、それ以来琵琶に對する認識が異下一円に行渡って、遠方の小学校にまで演奏に行く機会が多くなった。

大民の病氣は一旦小康状態となり、永年の懸案だった皇族方の御用を取戻す念願をあきらめ、銀座の店の敷地を松坂屋に譲渡する契約成立するや直ちに、日比谷公会堂前通り、つまり内幸町を霞が関に向って行けば左側、



狂酔亭漫録 第百十回 忍術 雑考

古谷 寛 水

或日近郷の小学校学芸会に出演のため乗替
駅で列車を待ちおるところえ、一人の宣教師
から、琵琶の先生のようにですが、と声をかけ
られ、その人なつこい人相の顔に無言で挨拶
すると、「どちらえ」と聞かると、某小学校
の学芸会に頼まれました、と答える間もど
かし気に、近頃噂に聞けば石童丸の歌が流行
のよして、あなたもおやりですか」と、私達
正派人の間では余りやりませんが錦心流の方
では殆ど歌わぬ人はいないでせう、何処の会
でも必ずプログラムに載っていますから」と答
えるのを聞きもあへず名刺を取出し、「私はあ
の歌の作者ですが、ついでとあなたからも挨拶
を頂いた事がないのですよ」と笑い乍ら殆ど
同時に入って来た上下列車に、別れ別れの乗
車となって仕舞った。その名刺にはキリスト
教宣教師四竈納治とあり、石童丸の作詞者四
竈氏はキリスト信者だったのか、と初めて知
った訳だが、それより二十数年後中支の上海
と南京間の駅で再びめぐり逢いながら、支那
人達雑踏の中で親しく言葉を交わすといまも
なく只挨拶だけで別れてしまった。因に、今
日私の住む世田谷区経堂に近い宮の坂の教会
に、四竈暢といわる、牧師が見えるので一度
訪ねて見る積りなれど、中々よい機会がない
尚前述活人画発案の一人、本田あや子夫人、
旧姓小松崎女史は現在芦屋市平田町に、亦小
原久忠は函館市千代の岱町にそれぞれ健在に
て今日も通信は断えないが、吉川直吉氏のみ
消息不明なのは気懸りである。

前回迄執筆した大坂落城に関する文中に、
忍術者猿飛佐助や霧隠才蔵の名が見えるが、
どうも此の時代あたりから忍術というものが
一般化した様で、私も中学生時代に猿飛佐助
や霧隠才蔵の忍術が面白くて立川文庫等を耽
読したものであるが、其当時から現在に至る
まで、大衆小説や漫画本は固より、時代映画
やテレビに至るまで、忍術は青少年ファンの
興味の的となつてゐる有様なので、今回は忍
術に関する書を要約して概略を紹介する。
忍術。忍びの術。
所謂無虚実の転換法として遁形の術が喧伝
され、その術に
天遁十法即ち、日遁、月遁、星遁、雲遁、
霧遁、雷遁、電遁、風遁、雨遁、雪遁。
地遁十法即ち、木遁、草遁、火遁、煙遁、
土遁、屋遁、金遁、石遁、水遁、湯遁。
人遁十法即ち、男遁、女遁、老遁、幼遁、
貴遁、賤遁、禽遁、獸遁、虫遁、魚遁。
以上三形三十法がありとされ、江戸時代の末
期戯作者等が之を誇張して表現して以来、忍
術は変幻不思議の法術視されて来たが、これ
は「五雑俎」の如きが、金遁、木遁、火遁、

土遁等その物を見れば即ち隠るべしと伝え
木火土金水五行に象る理によれる便法で、元
来が五行の陣備にある兵法者の口伝が、忍術
の上に転換されたものが多い。
兵法の書はすべて一子相伝で、蘊奥を極め
た弟子でないと尤可を与えない不文律があつ
た。戦国時代に需求された諸方の兵法者が適
所にその法を伝へることがあつて応用の研究
が積まれ、世に所謂忍術四十九流が称せらる
頃には、兵法の一伝統に伊賀、甲賀の忍術
者が特異の忍術を加えて一流を称したよう
で忍術者の忍術は兵法者の法術を離れて特殊
の戦法というより忍びの術に統一されるに至
つたらしい。
伊賀甲賀の者が諸国の隠密として抬頭し、
殊に天文十年徳川家康警固の功によって召出
され幕府の役向を仰せ付けた以後は、全く
隠密忍びの役が彼等の本懐とする処となり、
各藩諸侯直参の忍目付等がまた忍びに適うた
忍術者を採用した。將軍、諸侯直参の忍者が
その行動を秘密にした事は当然であるが、そ
の伝統の術に於ても妻子眷属にまで秘密とさ
れ、これを秘密として授けべき一子なれば
一切忍術の書を火中したと云われる。
これは、その秘密は往々にして一家一藩稀
には歴史に關係すべきがためであつて、術の
伝授、隠密の事項は忍術者の群の間に於ても
秘密とすべきを存し、互に一種の秘密結社と
もいへべき一部落をしながら、他の秘密結
社に対し、而も各自の間にも夫々の秘密を保

つべしとした。
この秘密主義が、戦国時代に隆盛なりし忍
術者の各流各家を衰微せしめた原因であり、
且又伝授の方法を廃絶せしめた原因でもある
泰平と共に忍術者の需要をなくし、従つて忍
術者は多く未熟で遂に多くの口伝の本体を失
い、練達の士は故なく未熟の子孫に伝授すべ
からずといふ不文律の罰法に制せられて奥義
皆伝をなさざりし故、遇々忍術の極意書「虎
の巻」といふものが散見されても、術に添う
薬法、施術等の正確を掴み得ない型のみを伝
えている者が多い。のみならず、その書の内容
文的なるものは、その活機を捕捉すべき眼目
を伝統せずして徒らに科学的真理の影をうつ
せるに止まるの憾を遺している。

れる如き道具を携帯しないのを法とする。二
人以上の時用うる吊梯、巻梯、高梯、飛梯、
雲梯の如きは、補助する者の役とし、登器の
如き小さくまとめられる釣繩の種はこれを持
参するも適當の場所に隠して掃路に利用する
といふ風に、忍士はすべて身軽専一とする
「鍛錬」 忍士としての特異のもので、例
えば歩き方の鍛錬では迅速な忍び歩きが工夫
される。所謂蟹走りといふ歩き方で、両足の
踵をくっ付けて左右の指の間を六十度位に
開いて立ち、それから片方の足を踏み開ける
だけ開き、も一つ片方の足を引き寄せる拍子
に前方の進路の方へ踏み出す歩き方で、この
歩き方の熟練によると一日三、四十里は楽に
歩けるとされてゐる。また城畑や湖沼を渡り
越す術には浮沓、水掻、材木、筏を使用し、
家に忍び込むには雨鳥の術、乗音退音術、地
期取の法があり、森を抜けるに高飛、幅飛、
木の間隠れの術があるが、それらの鍛錬を後
世は五遁の術と云うてゐる。

「察気」 斥候、偵察の役目を仕遂げるに
必要な天候の変化を見分ける術と、城塞の中
より立つ一種の気を見て天象、地象、人象を
察する術とで、この術に妙達するを忍士の専
常ならざる経験とした。「妙術集」其他によ
つてその皆伝と図録が伝えられている。
「活法」 これが忍士の極意で、この法術
の披瀝のうちには探偵上今日に於ても練磨す
べき科学的秘法が伝えられている。練活、
薬活、妙活の三応用があり、妙活のうちには
多くの魔術式の幻法が用いられている。(終)

幕末世の忍術者が伝えた忍書は、用具、鍛
錬、合詞、察気、活法の四つで、それ以上は
忍術をその一法として伝ふる兵術家の伝統す
るところとなされ、忍術家は兵法を以て立つ
名家の高等法術の極意皆伝を受くべきを念願
し、それを伝ふる者が即ち忍者の真髓を受け
るものとされたのである。
「忍者の用具」 忍びの衣装、蘇枋色の手
拭、鐔広の短刀を始め、忍び込みの小道具万
般であるが、一人忍びには捕縛されて怪しま

幕府では組によつて相違がある
が上に統制された忍び詞がある。しかし御庭
番には合詞がない。これは尤も単独を期した
からである。忍士はそれぞれの忍士間の合詞
を知るに努めたばかりでなく、民間の他の使
用語とそれの合詞、例えば大工、左官、香具
師、博徒、乞食等の使用語や合詞を自由に使
用し得る教練を重ねていた。これは萬一の場
合如何なる生業者に身を扮するも言語動作に
よつて怪しまれない用意であつた。

時 六月一日(日)午後
所 東京上野「本牧亭」
都派 錦穂一門会演奏会
琵琶 主催 錦穂後援会
後援 日本琵琶楽協会
○ 錦心流、筑前の諸先生賛助出演
私の音楽ノ
水藤五郎
プロと云うこと
琵琶界にはプロが少なくと云われています。
この事が真実か否かは別として、この場合の

プロとは何をさしているのが問題であり、字句を正せばプロフェッサーは少ないと云うことになり、プロとはプロフェッサーの略で、英語では職業人、専門家等の意味が適当とされていきます。ただ注意すべきは、この職業は知的職業、即ち芸術家とか学者、賢者につけられることであり、直訳して、琵琶界には琵琶の専門家が少ない、或いは居ないと云うことになり、プロフェッショナル(知的職業)にたずさわる人、若しくはその分野に精通している専門家、これがプロフェッサーであり、プロフェッショナルマンであり、英語では、大学教授等を呼称する際に必ず頭におかれるのが常であります。日本で云へば〇〇先生、教授と同じであります。又この様な意味の外に、スポーツ選手、特に野球選手を指す時にプロ選手と呼んで、職業スポーツの選手であることを意味します。もともと今日では、全てのスポーツについて、プロ、アマとして使われています。字源を歴史的に考えれば、アメリカに於いてプロスポーツとして古くから人気があったのは、なんと云ってもベースボール(野球)なのです。この様な語法が生まれるのは当然でありましょう。さて、私がこの簡単な単語の意味に少なからずこだわりを記したのは、この第一の場合の「専門家、知的職業人」と云う意味を考え、第二の場合の「職業選手」と云う意味を考え、そして琵琶人のプロを考えたいと思つたからでありました。知的な分野、仮りに文学、哲

学、物理学等の学問に於て、専門的知識を有し、教職に在る人に対してプロフェッサーなる呼び方をするのは日本に於ても同様であります。その人の見識を認めるのが常でもあります。つまり専門家、権威者への礼称であり、その様な立場に在る人への畏敬心の表意でもあります。

「……については専門的知識を持っている……」については権威だ」と表現すること、これはしばしばあります。この場合には、飽くまでも知識とか経験とかが問題とされているのであります。これに対してプロ選手、プロスポーツ等と表現する第二のプロフェッサーは金銭即ち報酬を取るスポーツ、給与を取る選手の意味に直結しているのです。今日のスポーツに於て、プロとアマの選手の相違を、技術の優劣のみ求めることは出来ません。アマチュアの選手であっても、プロ以上の技量を有する人は多数あります。スケート、スキー等は現役のアマチュアを退いて、シヨリーの活動を目的でプロスキー、プロスケイターになる訳で、競技技量は当然現役アマが上であります。レスリング等も、アマチュア時に於けるレスリングはシヨリーのプロレスリングとは異つた技術体系を有しています。つまり金銭を取るか否かがこの場合の決め手となります。プロの意味には斯くの如く二つが考えられます。

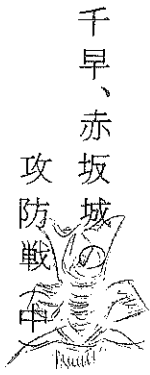
然らば「琵琶界にプロは少ない」と云う通説のプロとは如何なる意味と解す可きでしょうか。元来、芸術活動と金銭とは無関係ではないかと私は思っています。つまり芸術で金銭を得ようと思つての間違ひなのです。勿論現実生活は偉大な芸術が存在し、巨額な収入を得ている例はあります。しかしそれはよく検討してみると、その芸術分野産業の得た収益の一部にあやかっているに過ぎないのです。映画スターが多額な出演料を得る、これは一見、その俳優の芸術演技に対して支払われた様に思われます。しかしそれは誤りで、映画産業が製作した映画、それはプロスポーツと同じくプロ映画であり、収益を前提とした、要件とした活動であつて、事業活動への報酬なのです。それが証拠に、俳優の演技は映画企画が起つて、その活動が始まるのです。俳優の本来潜在的に蓄わえている芸術能力とは全く関係ないことなのです。

映画がヒットして観客数が増える、経済的法則で需要と供給のバランスがたまたまとなつたのです。人通りの多い街路に、パンが売られていまして、余程まづくない限りパン屋さんは対価を得ることが出来ます。しかし繁華街の映画に存在する芸術の全てが認められるとは限らないのです。芸術は個人価値感に始まつて、それに終るのです。この曲は琵琶の名曲だ、その演奏者は名人だと自称しても、それで直ちに収益は正比例も反比例もありません。つまり、もともと関係はないのです。即ち芸術界に於けるプロ、芸術分野に於けるプ

ロとは、芸術については専門家であり、権威者であるのですが、それと貧富は別問題なのです。

琵琶人に於いても然りであります。ただし琵琶界のプロは貧とは関係が深いと云うのが現実の様ですが、この事は別の方法で論じなければなりません。結論的には、琵琶についての専門家、即ち芸能として、芸術の一分野を占めるにはどうも荷が重すぎる琵琶人が多く、芸術家と云える人が少ないと云う意味だと解することが出来ます。但し、これは解釈の論理を申しただけで、現実の琵琶界をとらえているわけではありませんで、誤解のない様に了解してほしいと思つています。

(続)



千早、赤坂城 攻防戦中

正成の奇計(一)

正成は城中に二百余騎をとどめ、三百余騎を山中に隠した。たゞ一もみにと城壁に取りついた敵兵を、櫓の上から矢を射かけて死傷千数百人を出して攻めあぐんだところを、楠七郎、和田五郎ら手勢を二手に分けて、東西の山蔭から菊水の旗をなびかせて襲いかゝる敵陣混乱の中を魚鱗がかりで突入して暴れ廻る。これを見た城兵は、三の木戸をサツと開

いて大軍の中に突進し、縦横無尽に斬りまくれば敵兵はクモの子を散らすが如くに石川河原に引退く。その道五十町が間、馬物具を捨てたること足の踏む所もなかりしという。

翌日は十萬騎を後の山へ、二十萬騎で城をとり巻いた。四方の城壁に取着くと塀は二重になつていて、塀の釣縄を一時に切落とすと敵兵は塀諸共に押潰された。尚も城壁に取りつくと、大木大石を投げ落とし死傷七百余人、熊手や櫓をもつて城に迫ると、城中から長い杓で熱湯を浴びせかけた。

斯くして一週間過ぎたが、敵は城を包圍して持久戦にでてきた。正成はこの小城で持久戦の不利を悟り、城を脱出して後事を図るべく、風雨の夜城中に大きな穴を掘つて討死の者三十人余を穴に埋め、城に火をかけて脱出した。敵はこの時とばかり押寄せ穴中の焼死体を見、あな哀れなりけり、正成一族も城と共に自害せりと思つたが、何ぞ計らん護良親王をはじめ一統は逸早く脱出していた。こうして赤坂城は十月二十一日陥落した。

翌二年八月、突如大塔宮は吉野に現われて吉野熊野の各僧兵、山伏等を味方に挙げ、これに依つて正成も十二月兵を挙げ、赤坂城守備の湯浅成仏軍を急襲して奪還し、城を大修築すると共にその奥に「千早城」を要害堅固に構築した。

元弘三年一月、紀州の御家人軍を天見谷に討ち、更に堺、岸和田方面に進出、天王寺に陣した。六波羅軍の隈田、高橋らの将兵五千

騎を天満の渡辺橋に迎え撃ち、橋上より追いつた敵兵は東西より挾撃して摂河泉の三州を席捲した。また宇都宮公綱の大軍が敵の応援に駆けつけると、正成は野伏を集めて遠近の山々に警火をたかせ、幾万の軍勢在る如く見せかけたので、宇都宮軍は恐れをなして京へ退いた。正成はサツと兵を収めて千早、赤坂城に引上げた。

一月中旬、吉野河内の正成軍兵に敵は驚き又も大軍を西上させた。大仏高直は大和路を阿曾時治は紀伊道を、三軍の兵三十万七千五百、諸国の軍勢合せて八十万という。幕府軍は北条一族や諸国外様大名ら全力を挙げて雲霞の如く押寄せしめた。

正成は河内、和泉の諸城、皆に各将を配置して待受けたが、阿曾時治の大軍は沿道の諸城を陥れて進み、二月二十二日赤坂から、大仏貞直の部将佐竹貞俊軍は背後の金剛山から、横手の大將は五條紀見から、それぞれ互いに策応して赤坂城総攻撃を開始して遂に落城、吉野も陥落して護良親王は高野山に逃れた。

正成は幕府大軍の包圍下、孤立無援の千早城でよく戦つた。城の四方二、三里の間には敵兵が充満し、その旗差物は秋のすすきの穂が風に靡く如く、トキの声は天地を震わせた。押寄せ敵兵に高櫓の上から数限りなく大岩石を投げ落とし、殺傷する者一日五千人に及び、記録掛十二人が昼夜三日間、筆を置く暇がなかつたと伝えられている。(未完)



編集部

茨木童子碑除幕式

茨木の地名にゆかりの深い琵琶歌の「羅生門」や「綱目」...

茨木市史によると、茨木童子は平安中期に水尾村(現在茨木市水尾町)に生まれ、幼児期に茨木村のはずれに捨てられて...

東京国立劇場で「道成寺のさまさま」と松田静水氏演奏 題する芸団協主催公演が二月十九日午後五時から東京の国立劇場で開催された。

宮城教育大学に 宮城教育大学の音楽講平家琵琶講座 座に四月の新学期から平家琵琶の奏法研究が取入れられることに決まった。

薩摩琵琶 三月十六日(日)昼一時東京愛三月演奏会 宏山菜根、主催正統会。挨拶辻靖剛 春日野一太越雅舟 花紅葉一岩屋吟照 七御落一太旗湖舟 物狂一正本溪舟 城山一池野谷吟岫 湯陽江(下)一清川風舟 錦の御旗一佐々木精 鉢の木一須田誠舟 敦盛一八束一滝口入道一遠藤鶴東 岩佐中佐一生田晃堂 吉野落(下)一栗原雨竹 桜狩一太塚岳峻 本能寺一古家絃風 旅順開城(上)一関口竜城 武蔵野一堀越素舟 野田の笛一鈴木鶴福 川中島一青沼紅舟 弁の内侍一太村誠城 桜一柏木篁道 門琵琶一合奏。以上順演の後小宴懇談会を開き解散した。

武 会 合同研修会 三月十六日 一水会多摩支部 (日)昼一時小金井市福祉会館。俊寛一篠宮櫻水 井伊大老一中島瀑水 竜の口一中村修水 本能寺一伊藤警水 月下の陣一石井效水 松の廊下一高杉洲靖 彰義隊一清水源城 小敦盛一坂本錦道 以上熱演夕六時散会。 日本芸術琵琶 三月十六日(日)昼一時東京柏会三月例会 新宿柏ビル六階。お江戸日本橋・門琵琶・伴流野勢西田風謡切第六、七弾法連弾一山崎錦幽 西郷隆盛一青木晴城 荒城月夜の曲一日原錦楼 平家物語朗読一雨

官会長 短曲月さくら一錦幽 船弁慶一石田脩水 新曲紅葉狩一長谷川錦舟。以上研究演奏をして七時散会。当日は若林杏雨、関口修水、杉山旗水、若宮旭登の四氏病氣又は事故のため欠席残念であった。

故水藤錦樓師を 偲ぶ座談会 から東京品川の茂草すし本店秋葉芳水氏宅に故師生前の親交者や遺弟ら二十数氏が集って首記が催された。まづ会場床の間に故師の遺影を安置し献花献灯も清楚に一同厳肅裡に焼香したあと茶菓を口にしながら暫し在りし日の追憶談に花が咲き、やがて故師の冥福を祈りつゝ左の通り順演献奏して霊を慰め八時四十分散会した。

羅生門一小沢錦弥 城山一白比シズ 井伊大老(上)一太場穂苑 同(下)一有馬白豊 竜の口一加藤錦陽 うつぼ猿一鈴木桜陽 黒田武士一箕村綾洲 新撰組一村木桜柳 大高源吾一平野鉦水 道成寺一斎藤桜風 うつぼ猿一秋葉芳水、藤波桜華・絃新部桜水 琵琶演奏一鈴木流泉 詩吟吉野一西村錦風 敦盛一都錦穂。この間秋葉芳水氏の挨拶があり又故師の録音曲垣平九郎を鑑賞した。尚滝原流石、藤本露風、石井桑水、谷内吉平の四氏も列席。

物故会員追悼 三月二十一日(休)十一時半琵琶演奏大会 京都東山安井金比羅宮会館主催薩摩琵琶四明会。会員の外東京正統会、鹿兒島同好会、京都琵琶協会、一水会京阪神各支部の盟友をゲストに迎えて開催。舞台左側に最近物故された小林捷捨、奥定天錨、杉岳芳、市来芦村四会員の遺影を安置供華献灯して慰霊祭を厳肅に行い故人達の演奏録音に続いて左記の通り順次献奏したあと関係者約五十人が一堂で夕餉を共にしつつ故人

の懐想にふけり七時半閉会した。尚当日は献奏予定者二十六人の内風邪などで六人欠演、満員の聴衆を落胆せしめた。

錦心流琵琶 三月二十三日(日)正午大阪天香の会 神筋朝陽会館、主催広瀬敏水氏、盛会。金剛石一中田敏仙 桜狩一平岡克水、近藤登水・絃稲葉卓水 曾我兄弟一広瀬顯水 湖水乗切一中野淀水 児島高徳一杭東詠水 本能寺一森中志水 井伊大老一太塚小西雨水 敦盛一名古屋神藤敏水 菊水の旗一神戸楊嶽水 大楠公一京都中島旭穂 茨木一豊橋田中訴水 五条橋一京都早川畿水 白虎隊一東京安藤敬水 横笛一同北沢来水 小野訓導一同前田洲月 常盤の前一同桑名洲聖 羅生門一酒田山本周水、池田青水、佐藤智水。絃荒井藍水 雪晴れ一會主広瀬敏水。

三位研修同志会 三月二十三日(日)昼三鷹第十九回例会 市上連雀公会堂。門琵琶月さくら一山崎錦幽 足利山一伊藤友彦 錦の御旗一柏木篁道 伴流謡切能勢第六弾法西田風第七弾法連弾一錦幽、紫山、錦道、桔梗の旗掲げ一伊藤警水 伊豆の御旗一中村修水 武蔵野一立野岳朝 俊寛(上)一篠原櫻水 小松の操(上)一伊集院鼓城 彰義隊一西村嵩峻

各流派琵琶 三月三十日(日)夕六時東京晴風弥生例会 杉並区高円寺会館、主催浅野晴風氏。菅公一岩崎 月下の陣一竹内桜狩一太田尾青桜 旅一諸遊 吟兒島高徳一西野青清 白虎隊一竹内寿風 本能寺(下)一本橋錦嶺 門出一坂入晴峰 茨木一福島脹水、野口嶮水 衣川一高田室水 西郷隆盛一青木晴城 川中島一太関英子 竜の口一加藤錦陽 羽衣一山下晴楓 俊寛(下)一會長浅野晴風。尚四月十九日昼東京三越劇場に於ける邦楽伝統名流会に浅野晴風氏出演。

松田静水 四月一日(火)昼二時東京上野一門演奏会 本牧亭、主催静水会本部。城山一中谷美水 乃木将軍一岡野間水 白虎隊一采崎統水 本能寺一関口弁水 羽衣一宮川宏水、中村亭水。絃春水 重衡一末吉希水